

今月の 我がマチの 一番星☆



昨年おいわけメロンまつり会場撮影
(写真左端が菊地さん)



菊地昭雄さん

多くの人の協力で支えられて活動を継続

「役場の人に頼まれることが多いんですよ」と語る夕張出身の菊地昭雄さん(追分花園)は追分町(現安平町)に来て土地改良区に勤務。当時は役場内に事務所があり町職員と親しくしていたといいます。

「それが縁で広報委員や社会教育委員などの公職も勤め、北海道薬物乱用防止指導員も担当課長さんからの依頼でした」と回想。「大麻は袋の材料として奨励された時代もありました。昔はそれを吸引する人などいなかったと思います。いま北海道は『大麻天国』かもしれないですね」と推奨と禁止という国策の矛盾をちよつぴり皮肉交じりに話しました。

「薬物乱用の蔓延が指摘され、自宅での栽培や売買が社会問題となっています。指導員としてイベントや街頭で

キャンペーンを展開し、薬物乱用の危険性などを住民に広めてきました」と活動について話を続け、「当初は高校生を対象に啓発運動を実施。その後、更生保護女性会や追分駐在所と連携を図り、メロンまつりでチラシやうちわなどを配布し住民に薬物乱用防止を

呼びかけてきました。地道な運動ですが、着実に浸透してきている」と感じているそうです。今年、長年の業績が認められ全道の指導員連合協会長賞を受賞された菊地さんですが「個人として表彰されましたが、関係団体や行政、駐在所

の皆さんの協力の賜物です」と改めて感謝を述べていました。「年齢も70代後半になりましたが、自分を必要とされているうちは地域に役立つことを続けていきたいですね」と控えめに決意を語ってくれました。

母親に感謝の気持ちを



山本 聖子さん

「むかわ町の『花よし』本店の吉田^{としあき}紀晃社長(現会長)から頼まれて取り組んで25年になります」と話す早来店の山本聖子さん。毎年母の日の前日に子どもたちに「お母さんにプレゼントしてね」と声をかけてカーネーションを無料で配布してきました。早来市街にチラシを出し、今年は70人ほどが店に来たといいます。小学生以下の子が対象で、保育園児は園の帰りに立ち寄るとのことです。親子で来ても母親は店の外で待つケースがほとんど。

「30歳を過ぎた私の子は小学生のときに何度か来ただけです。子ども心に自分の母親から手渡されることに抵抗があったかもしれませんね」と苦笑いします。

「長年この活動をしてきて、子どものころに母親にしてあげたことを今度はわが子にしてもらおう立場になっていると懐かしむ親もいるそうです」と語ってくれました。仕事などで忙しい日々を過ごしてきた山本さんでしたが、本店からの依頼で始めて長い年月が経つうちに「子どもたちも結婚し自分にも孫がいる年齢になり、母に感謝することの大切さを改めて感じているのでは」と自分の同年代の頃と重ね合わせ振り返ります。

「花1本のお金は子どもには大きな出費だと思います。私は少しでも手助けすることで、お母さんたちに喜んでもらえましょうね」と



カーネーションを選別する山本さん

受け取った人の笑顔を頭に思い描きながら話し、「少子化の影響で配布するカーネーションの本数は少なくなりましたが、子どもたちに『お母さんありがとう』ということばを添えて渡してほしいですね」と山本さんは優しく温かみを感じる口調で答えてくれました。